

公園(パーク)と庭園で見られる花風景(愛媛県)

関西学院大学総合政策学部 教授
佐山 浩

1. 愛媛県は「柑橘王国」

私にとって愛媛県と言えば、やっぱり「みかん」である。子どもの頃にテレビで見た竹脇無我さん主演のドラマ「坊っちゃん」とポンジューズの宣伝が方言を介して結びつき「愛媛県＝みかん」として強烈な記憶となっている。加えて「蛇口からみかんジュース」の都市伝説である。ネットで調べていたら、松山市内には本当にあるらしい。ところで愛媛県の HP によると「かんきつ類の品目数を県別にみると、愛媛県は 40(温州みかん 1+中晩柑類 39)あり、これは日本一…(2位の和歌山県の 1.3 倍)。ちなみに、愛媛県が独自に行っている統計調査によれば、名称が確認されたものだけでかんきつ類の収穫品目数は 47 品目」とある。実は愛媛県は真正銘の柑橘王国だった。

愛媛県のみかん栽培は、一説によると今から 200 年ほど前に加賀山平治郎^{かがやまへいじろう}が四国遍路の途中に高知県で苗木を手に入れて持ち帰り、それを植えたのが始まりとされる。その子孫となる樹が宇和島吉田町立間地区^{よしだちやうたちま}にある。

さて、みかんの話はこの辺りにして、今回は愛媛県のパーク(公園)や庭園の花風景をいくつか紹介していこう。

2. 南楽園のハナショウブ



写真2 開花したハナショウブ



写真1 愛媛県イメージアップキャラクター
「みきゃん」の入ったポスター

南楽園は愛媛県南部、宇和島市^{つしまちやう}津島町にある。5月中旬頃になると造園家伊藤邦衛設計^{いとうくにえ}の池泉回遊式の庭園に設けられた2個所のショウブ園^{ちせんかいゆうしき}(計 4,000 m²)では紫、黄、白など3万株、25万株のハナショウブが咲き乱れる。特に江戸中期の建築様式を取り入れた茅葺の休憩所を点景にした風景は見る人の心を和ませしてくれる。

1969(昭和44)年に閣議決定された新全国総合開発計画(新全総)は

「豊かな環境の創造」を基本目標に掲げ、観光レクリエーションの主要計画課題として「自然観光レクリエーション地区の整備および大規模海洋性レクリエーション基地の建設」を盛り込んだ。1970（昭和 45）年には旧建設省が「レクリエーション都市整備要綱」を決定する。この整備要綱に基づき進められた南予レクリエーション都市整備事業の一環で誕生したのが南楽園である。正式開園は 1985（昭和 60）年で広さは約 15ha ある。進士(2001)によると護岸の石組資材はトンネル工事などで発生した 8,000 トンの自然石であるという。

3. マイントピア別子のシャクヤク

マイントピア別子は愛媛県東部・新居浜市に位置する鉱山観光テーマパークである。マインは「鉱山」、トピアは「ユートピア」に由来する。

敷地内には中国・四国地方屈指のシャクヤク園がある。黄色のオリエンタルゴールド、紅が冴えたレッドチャーム、ピンクのサラベルナール、白いアルプスなど、40 種、約 3 万本のシャクヤクが咲く。

マイントピア別子は別子銅山採鉱本部跡地を利用した公園として 1991（平成 3）年に誕生した。現在、^{はでば}端出場ゾーンと^{とうなる}東平ゾーンの 2 つの地区からなる。端出場ゾーンは、1930（昭和 5）年に東平地区から移転された採鉱本部が 1973（昭和 48）年の閉坑時まで置かれていた場所である。約 6ha の敷地には、拠点施設で温泉施設のあるマイントピア本館のほか、点在する観光坑道や旧水力発電所などの産業遺産がある。一方、東平ゾーンは、もともと採鉱本部があった場所で最盛期には約 5,000 人が住んでいた。



写真3 見頃を迎えたシャクヤク



写真4 旧端出場水力発電所



写真5 トピア内に移設された迎賓館(泉寿亭)の玄関先

4. よしうみバラ公園のバラ

よしうみバラ公園は愛媛県北部・瀬戸内しまなみ海道の通る大島にある。大島西側の^{おおしま}ぽっかりと口を開けたような入江の奥に広がる^{よしうみこう}吉海港に面した公園である。面積は約 2.8ha で、開園は 1993（平成 5）年である。



図1 よしうみバラ公園の位置図
(地理院タイル)



写真6 色鮮やかなバラ

世界各地のバラ 400 種 3,500 株が園内花壇に植栽され、5 月中旬から 12 月末までバラの美しさを堪能することができる。5 月にはバラ祭りが開催され、大勢の人でにぎわう（2024 年は 5 月 18 日（土）～19 日（日）に旧吉海町の今治市合併 20 周年を記念して開催された）。フランス屈指のバラ庭園「ライ・レ・ローズ」からナポレオン皇妃ジョセフィーヌが蒐集したオールドローズの「ジョセフィーヌ・コレクション」などで知られている。

5. 天赦園のフジ

愛媛県の南部・宇和島市にある天赦園には 6 基の藤棚がある。江戸時代に亀戸天神から移植されたものと伝えられる野田藤をはじめ、池上にかかる長さ 24 メートル、幅 4 メートルほどの太鼓橋式の藤棚を飾る白玉藤で知られている。白玉藤は房が垂れ下がる一般のフジと異なり、上向きに伸びるのが特徴であり、「上り藤」とも呼ばれている。



写真7 「天赦園」の由来について書かれた園内の案内板

宇和島藩主 2 代藩主伊達宗利が 1672（寛文 12）年～1676（延宝 4）年にかけて浜御殿を造成したことが天赦園へとつながっている。江戸末期、第 7 代藩主宗紀は、この浜御殿の南寄りの一角に隠居所を造るため、1862（文久 2）年に工事を行い、完成した潜淵館に居を移した。1863（文久 3）年には勘定与力であった五郎左衛門に命じて庭造りに着工し、1866（慶応 2）年に完成した庭園

を天赦園と名付けた。名前は、初代秀宗の父伊達政宗が作った漢詩「馬上少年過 世平白髪多 残軀天所赦 不樂是如何（馬上に少年過ぎ 世は平にして白髪多し 残軀は天の赦す所 樂しまずんば是をいかにせん）」（この漢詩は写真 7 の園内にある見取図を参照した）に由来する。

作庭年代は江戸時代末期と比較的新しいが、意匠や技法に優れたところがあり、かつ園路に沿って一周しながら眺める風景が変化に富んでいることから、1968（昭和 43）年に名勝に指定されている。面積は約 1.1ha で、園池を中心に、池は岬、入江など屈曲が多く、要所の石組には和泉砂岩が用いられている。園の周囲はクロマツ、クスノキ、ウバメガシなどの常緑樹により遮蔽されており、園内にはソテツやビロウといった暖帯性の樹木もみられる。

【引用・参考文献等】

- 1) 西田正憲・佐山浩・水谷知生他『47 都道府県・花風景百科』丸善出版、2019
- 2) かんきつ類の統計 - 愛媛県庁公式ホームページ (pref.ehime.jp)
- 3) 進士五十八「リサイクル社会と景観創造」『グリーンエイジ』2001 年 2 月号、日本緑化センター、2001